

平成27年4月4日

# 南の風 117

南部ミニバスケットボール連盟

会長 藤原 敬一

116号の、林 永甫氏のコメントの続きです。

「昨年（このコメントの時点での）、日本はアジアNO.1になりましたが、世界に出れば日本は小さく身体も弱いのです。アメリカ人やヨーロッパ人を相手にしたら何もできなくなりますよ。それを私は心配しているのです。どうしたら大きい選手を引き出して得点できるか、ゲームに勝てるかをこのWJBLのリーグから考えてプレイしていかなければなりません。」

林氏が危惧しているのは、現在のWJBLリーグ全体が、3Pシュートに頼り過ぎではないか、また、緻密な戦術がなく、シュートが入らなければそれまでというチームが多いと指摘しています。如何にノーマークをつくり攻撃するかが重要ではないかと言っています。

聞いていてなるほどと思うことがあります。実は私も、林氏と同じように感じるがあります。ミニバスの指導者の私が、WJBLリーグのゲームの戦術のことを語るのはいささか不遜かもしれませんが書いてみます。WJBLリーグは同じチームと2試合続けて戦うことが多いです。1試合目は3Pシュートがよく決まり、差がついて〇〇チームが勝ったとします。しかし、次の日の2試合目は3Pシュートの確率が悪く、負けてしまうということはよくあります。前日3Pシュートがよく入ったプレイヤーは当然、次の日はしっかりマークされます。簡単に3Pを打たせてはもらえません。

もちろん勝敗の要素は、単純にシュートの成否だけではないことは分かりますが、シュートが決まらなければ勝てないのは自明の理でもあります。

3Pシュートは、日本が世界で勝ち抜くための極めて重要なスキルの1つです。フィールドゴールの得点の1.5倍です。各チームが3Pシュートに磨きをかけるのは当然です。最近は長身のプレイヤーも当然のように3Pを打ちます。WJBLのあるチームは、スターターの4人が3Pを打つことができます。しかし4人がすべてシュートを決められるかと言えば、そううまくはいきません。

林氏は戦術をしっかり磨き、ノーマークのシュートができる状態をつくる努力をすべきだと言っているのです。ご承知のように林氏は、「エイトクロス・オフense」を用いて、2005年日本航空チームをオールジャパン優勝に導きました。日本にくる前には、韓国女子ナショナルチームの監督として、「エイトクロス・オフense」を主戦法において、1983年の世界選手権4位、1997年アジア大会優勝という実績を挙げています。

「エイトクロス・オフense」は文字通り、フォワードが『8の字』に動きながら両サイドでスクリーンプレイを行って、チャンスをつくるモーションオフenseです。このオフenseは、オールアウトのアライメントを基本としますが、ポジションの役割が明確にされていることから、実際には3アウト2インでのスタイルに近い形で動きます。これには、インサイドのスペースを広く保つことを重要視する考えが窺えます。また、**センターが常にペイントエリアから離れた、ペリメーターでフォワードにスクリーンを掛けています。**この部分がこのオフenseの大きな特徴と言えます。インサイドの1対1では得点できないセンターが、アウトサイドのアウトナンバーを利用することが可能になります。ではまた。